



INFORMATION エセナおおた

特集: 柏木恵子さんの講演録

子どももおとなも共に育つ社会～男女共同参画の視点から～

平成24年3月5日発行

かかってこないかな、パーっと離して一人だけになりたい、というお母さんと同じような育児不安を持つ。つまり、単独で大人が社会から隔絶されることは、いくら子どもが可愛くて、育児が大事でも、大人にとっては、非常に不健全なことだということ

がわかる。また、育児休業をとったかなりの人が言うんですが、それまでは、やっぱり男は仕事と思っていた。仕事は大事と、今まではちょっと早く帰ってきて用だのなんだの言われると、「仕事だ」ってたいい断わっていたけども、育休をとって、子どもの世話、育児家事万端やってみると、なんでそんな仕事、仕事と言っていたかかってことが、自分では信じられない。そんな大事なことであったかな～って思って、育休が終わって会社に戻ると、会議などはさっさと終え定時に帰宅、家でこのほうがずっとおもしろいことがあると思うようになった。つまり、価値観が変わったということです。

スウェーデンの育児支援施設に視察に行ったとき、赤ちゃんを連れて来たお父さんがすごく多かった。お父さんたちは「僕たちは今、自分が育休を取って妻が働いています」「僕が永遠に育児休業を取っているわけじゃなくて、今は確かに誰かがカバーしてくれているけれども、自分が戻ったら、今度は自分がカバーするからお互い様です」と言われました。

このような認識が日本にも早く定着しないと変わらないし、女の人の育児不安はなくなりません。

男は強く、リーダーシップがあって、女の人は優しくて、従順で、というのは性別分業の時代。だけど、今は女の人も働くでしょう。かつては男の人に望ましいとされていた力が女の人も必要です。男の人も、人に対するやわらかい配慮や、あたたかい気持ちや、人のために働く力を持っていることが、これからはとても重要ではないかと思っています。

(テープ起こし: 蒲原利江 まとめ: 青木千恵)

現場ルポ③

ふだんやっていることしが、非常時にはできません。

平成23年3月11日東日本大震災の発災後、この情報紙「Information エセナおおた」において現場ルポを連載してきました。シリーズ最終回として、平成24年2月9日福島県男女共生センターにおいて「シンポジウム2012. 3. 11に向けて～災害復興における男女共同参画センターの取り組み～」に参加し、東北3都市の取り組み発表の中から宮城県仙台市の事例を掲載します。

仙台市には男女共同参画センターは2館あり、指定管理をしている財団法人せんだい男女共同参画財団の加藤志生子さんの報告によると、発災時エル・パークは6階のスプリンクラーが作動してしまい5階まで水浸し、エル・ソーラは免震構造の31階建の28、29階で物は滅茶苦茶だったが建物は無事だった。早急に片付け、使えるところで早速相談事業(緊急ダイヤル)から開始しました。無力感を訴える方が多く見られ、センターとしてはまずその方たちに寄り添っていかうと考へ、エル・ソーラは4月5日より再開、ボランティア情報などを提供することから始めました。

みんなが被災者のため、連携を取ることもすぐにはできず、動ける人から動いていきました。避難所で、男性リーダーから「つい立を立てることは一体感が損なわれる」と声高に言われると、女性たちは声が上がりにくくなってしまふ。被災者の声を拾う側に女性の視点がなければ訴えが通らない。その声を事業化したり、行政につなぐなど、中間支援ができないかと思へました。

洗っても下着などの干し場がないと声が多く聞かれるようになり、「せんとくネット」を立ち上げ、避難所暮らしの方々の洗濯物を一家族分ずつ袋に入れて(どこの家族のものかわからないようにして)、支援する人が自宅で洗濯を済ませた後、返却するという方法を編み出しました。これには300人くらいの女性が協力してくれました。

せんとくネットの女性たちから「物資がいっぱい届いても、若い子が喜びそうなものはほとんどないね。ものすごく我慢をしているね」という声がかこえてきて、女子中高生の現状を知るきっかけになりました。

そこで、ちょっとお姉さんの女子大生に被災地の女子たちの気持ちに寄りそう「女子同士のサポート」の企画を頼みました。その中から「MDG ガールズプロジェクト」がスタート。宮城学院女子大(M)とドレメファッション芸術専門学校(D)の



ティーンズ女子会 写真提供: 財団法人せんだい男女共同参画財団

学生さんたち(Girls)の有志のチームで「MDG」です。「楽しいことをやりましょう!」という発想から女子会を企画し、ガールズからガールズへのプレゼントを考えました。シュシュなどのアクセサリ、靴下、可愛いキャミソール、人気ブランドのショップ袋などがとても喜ばれ、手づくり、メイク、カフェ、プレゼントなどコーナーを設営して、楽しんでもらっているとのこと(写真参照)。このティーンズ女子会は今でも続いているそうです。

何かやろうと思うと「そういうニーズがあるのですか?」とたびたび聞かれました。それはニーズをとらえる目を持っていないと、何をしたいのか、何がほしいのかは理解できない、といったところで感じました。

気持ちの立て直しは「わたしにもできることがある」という積み重ねが必要だと思います。方法論に時間はかけられなかったもので、どんな方法があるかということは、走りながら仕組みを考えるという形でやってきました。「普通にやっていることしか非常時にはできません。自分たちの引き出しは急には増やせないんです」。この言葉は、大きな教訓として私の胸に響きました。

非常時にならないと表面化してこない男女共同参画の視点、ジェンダーの視点。防災・復興計画の中に盛り込むことは大切なことですが、この視点そのものが「いつも、あたりまえにみんなのなかに浸透していなければならぬ」と切に感じられたシンポジウムでした。 <文: 青木千恵>

「女編」の漢字をもとに 男共共同参画風にもってみました!!

好 『母が子をいつくしむ』思いがいいですね。最近では「男」編に「子」と書いてダンシではなく「育メン」でしょうか?!

姦 『かしましい』確かににぎやかな感じですが。「男男」の上に「男」がのると、なんだか「組体操」と読めそうです。

娘 『女性が一番良い時』だそうです。「男良」でイケメン!

婚 結婚式は昔、夕暮れ(昏・たそがれ)時にとり行なつたからだそうです。「男昏」で「定年退職」と読みましょうか。

婦 箒(帚・ほおき)を持っているのは今や女性だけではありません! 「男」編に「帚」で今話題の「家事ダン」。

900字もある女編の漢字ですが、男編はほとんどないそうなので、男編の漢字を考えてみました。

ほんの一例ですが、とてもおもしろく頭の体操になりますのでお勧めです。 <定池由紀子>



カフェ おひさま
エセナおおた1F

甘い香りのオリジナルコーヒー 150円

からだにやさしいハーブティー 150円

トースト各種 150円～

おいしいお茶でおもてなし
営業時間: 11:30～17:00
営業日: 平日(月～金)

東京都大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
〒143-0016 東京都大田区大森北4-16-4
電話 03-3766-6587 03-3766-4586
FAX 03-5764-0604
e-mail: escena@escenaota.jp
HP URL: http://www.escenaota.jp/
メルマガ: escenaotamail@yahoo.co.jp
指定管理者: NPO法人 男女共同参画おおた



子育てサポーター養成

子育てママも育爺も！子育て支援で社会貢献

子どももおとなも共に育つ社会～男女共同参画の視点から～ 東京女子大学名誉教授 柏木恵子さん

皆さんこんにちは。柏木恵子でございます。私の専門は発達心理学と家族心理学です。子どもは「どう育つか。育つためにはどういう育ちの環境が必要か」をお話します。

●専業主婦に育児不安が多い？

育児不安は主にお母さんに多いということです。その要因は、お母さんが仕事を持っているかいないかによるんです。今、子どもの発達だけでいいますと、働く親の子どもと、育児・家事を専業でやっている親の子どもとの間には、学業成績、社会性、非行のおこり方など、子どもの発達については全く差がないことがわかっています。そこで、育児不安がどっちが強いかというと、圧倒的に無職の人が強いということが明らかになっています。

これは「子どもを育てるのは母の手で」という考え方がいまだ日本の社会には何となく漂っている。どこにも書いてないんだけど、子どもを産み育てるとか、あるいは誰が育てるっていうと、「母の手で」という考え方。そのうえ「3歳までは母の手で」というように日本の社会には浮遊している。

子どもを持つと思うとそのことが頭をよぎって、仕事を持っている女性でも「やっぱり母の手がいいかな」「自分の手で育てたい」と思って、辞める人がいる一方、保育園などを利用し、仕事を続けたいと思う人が少なからずいるのですけれども、夫から「やっぱりお母さんが一番だよ。自分が稼ぐから子どものこと、家事は任せたい」と言われる。私は夫からの圧力と名付けていますが、その通りにしてしまう。結果、辞めた人のほうが働き続けた人よりも育児不安が高いということが、出てきました。このことは実に皮肉なことじゃありません？ いいとされてることに従って自分も決心して辞めた。あるいは、辞めさせられた人たちが、育児専業でやっているのにうまくいっていない。これには何か問題があると考えざるをえない。明らかに無職の人のほうが育児不安が高い、これは一貫している。なぜこういうことがおこるのか？

これには、いろいろな理由があります。育児不安といわれている大きな部分は、育児をしているお母さんが何か自分が楽しくない、イライラしてくる、それでつい子どものことを放っておきたくなる。ベランダで抱いていると、パッと手を離したくなるおっしやるくらい育児が疎ましくなっちゃう。育児そのものは高く評価しているにもかかわらず。

「自分は、子どもがかわいくて育児もうまくいっている。だからいいお母さんをやっていると思う。そのうえ手抜きしないで家事も料理もみんなやっていて、そういう意味で良い主婦であり、いい妻だと思ってる。だけどどこに行っても〇〇ちゃんの子ママ、〇〇さんの奥さん、あるいは漠然と奥さんと言われるだけで、自分が固有名詞をもった人としてあてにされたり、あるいは自分が力を発揮したり、意見を言ったりする時間・空間が私の生活にはなんにもない」

昔に比べれば、紙おむつもあれば電子レンジもある。ずっと時間はあるはずなのに……。時間がないということは、自分のために使える時間がなんにもなくなった。

そのうえ子どもを育て終わったあと、長い時間が残されている。お母さんではあるけれど、お母さんとしてやることはなくなっちゃう。個人として生きなきゃいけないのに、その準備もしていきなきゃいけないのに、そういう時間が全くない。昔のお母さんはいいお母さんさえやっていたらすんだ。ところが今はそうじゃなくなった。今が良ければ全てよしではない。

今は、子どもがかわいい、育児が大事だとみんな思ってる。だけど、これが永遠には続かないことをわかっている。したがってその前から、個人として生きるという力や、覚悟を蓄えておく必要がある。ところが、子育てしていると、時間もお金も自分の体力も心身のエネルギーも、みーんな子どもにいつっちゃう。無職とはいえ（それはとてもよさそうに見えるけれども）自分自身に投入する時間も少なくなる。本を読もうと思っても、くたびれ果てちゃってすぐ寝ちゃう。

なぜ有職のお母さんのほうが、育児不安が低いのかといえれば、固有名詞をもったその人自身の力やエネルギーがあてにされて、発揮されて、自分の資源を自分自身にもちゃんと等分に使っている。そのことが育児不安をもたらさない背景にある。これは、大変重要なことです。

戦争前は、産めよ増やせよだったでしょ。ところが、戦後になってからは、たくさん子どもがいることは家庭を貧しくしたり、女性の健康を脅かすということで、子どもは少なくしようという戦略を国がたてました。子どもは2人ぐらいがちょうどいいんじゃないかと決議した。それをメディアが喧伝して、豊かな生活のためには子どもは2人と、ものすごい大々的なキャンペーンをして急激に子ども2人の社会になった。その後変わったのは、少なく産んで、良く育てるというキャンペーン。よく育てるた

めに少子にしよう。少子良育戦略。

●「自分で」から「親の先回り育児」

日本は転ばないように「今度はこれやって」というような先回りの子育てが特徴ですが、少子になったおかげで行き届いちゃった。これは必ずしも良くない、日本の子どもたちは一般に勉強はできても自信がないというのが特徴です。

育てるということばかりに関心がいつっちゃう、そして子どもは育てられる、教えられるというだけで、子ども自身が育つということがだんだん縮小されている。このことは女の人が何を生きがいにするか、子どもも勿論幸せであることが大事なんだけれども、自分自身が幸せであることがとても大事です。

●お父さんが育児不安の原因に？

日本のお父さんは、いるんだけど育児からは不在という状況。この背景はそれこそ「母の手で」という考え方がこびりついている所以。「お母さんがやればいいんだ」という考え方。それからもう一つは「父親の出番は子どもが青年期になってから」という考え方が日本にはなんとなく流布していること。ところが、青年期になってのこのこ出て行っても魅力は失われているんです。小さい時からいることが大事なんです。

夫が何もしてくれない妻の育児不安をみると、歴然とした差があります。育児に父親不在の場合は、母親の育児不安が高いということがデータでわかります。「育児は任せるから、稼ぐほうはしっかりやるから」と言ったのがこのお父さん。任せた中で配偶者に育児不安がおこっているということが、大変重要な問題ですね。

人間の場合には、自分で働いてお金をもらって購入できるというように、高度な力を身に付けないと一人前にならない。それは全部、子育ての課題。そのためには、学校教育も必要だけれども、道徳も教えなければいけない、社会的な規律も教えなければいけない、自分はどう生きるかということについてまで、みんな教えなければいけない。これが全部育児だから。そのように育児が大変なものをたった一人でやるというのは、とてもできない。二人いることで、初めて安定した気持ちでできるし、子どもにも適切な働きかけができる。二人いれば相談するとか、自分だけ頑張らなくて、ある意味ゆとりができる。ところが、お父さんがいなくて自分だけだと思つと、過剰に子どもに関わってしまう。不安を持ちながら子どもに関わることが、問題点なんです。

●「ずるいじゃない！」って？

子どもが生まれる前はみんな働いている。ということは自分だって働く力を持っている、そして、働くということは大変だけれども、の自分を育てたり、社会的な刺激をもらえたり、自分の経済力を持ったり、ということを知ってる。ところが、自分だけが無職になった。夫の生活はなんにも変わらない。力の差だって、私が働けばもっと上にいくんじゃないかなどというお



母さんも少なくない。こういう時に「ずるいじゃない！」と抱く感情が夫婦関係についての疑いを持つようになるということも、大変重大なこと。家族の中で「ずるい」という感情がおこるのは、かつてはなかったこと。

昔は家事育児というのは、結婚前にしつけられた家事能力と、子どもを産んでおっぱいが出る、女性にしか育児はできなかった。そこで男は働いて、女の人は家事育児をという、いわゆる性別役割分業しかなかった。いまだに女性だけが、家事育児だけをしているか、働けるのに。性によって生活を分けるということの、合理性、根拠がなくなっちゃたのに、それが今でも続いている。その結果が一人で孤独な育児をしている。夫よりも自分のほうができるかもしれない。夫のほうが大変な仕事かもしれないけれど、私より自由度を持って暮らしているのは、変なんじゃない、ずるいんじゃないと思うのは無理もないことなんです。

例えば職業の中でスキルを覚えていくだけではなくて、忍耐力とかリーダーシップとか、あるいは総合的な思考力、色々なものが育っていると同時に、子どもを育てるという営みは、これをする人を育てているんです。父親をすることをおりちゃっているということは、子どもを育てるという営みのなかで、その人自身が育てられる貴重なチャンスを自分からおりちゃっている、大変残念なことではないかと思っています。



「子どもは自分の分身だ。自分と子どもは一体だ」という子どもに対する、非常に強い、甘い気持ちを持つのは、お父さんなんです。しかも、育児をしないお父さんほど強いんです。つまり育児をしなければ、子どもとの対立とか葛藤を味わうことはない。帰ってきて笑顔だけ見て、寝顔だけ見て「可愛いな～」と思うと、自分の分身と思える。

●お父さんも育休取得

育児休業をとったお父さんにインタビューをした研究を私の教え子がしたんですが、「男にできないことなんてない」ということがよくわかったと、みんな口ぐちに言うんです。しないから、できないだけ。

ところがそのお父さんも育事不安になるんです。奥さんのほうが仕事に行っちゃって、昼間は家事・育児だけ。最初のうちは慣れるのに一所懸命になっているんだけど、ある程度できるようになると、「あー、まともな大人と話がしたいな」「いつでも赤ちゃん言葉、赤ちゃん相手だけじゃ詰まっちゃう」と。電話